

第16回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

幻のモナミ

～東中野に集った文化人～



展示期間：令和元年12月1日(日)～令和2年1月30日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに	1
モナミとは	2
交流の場としてのモナミ	4
○夜の会 ○十五日会	
モナミを取り巻く人々	6
○岡本太郎 ○花田清輝 ○埴谷雄高 ○安部公房 ○五味康祐	
○針生一郎 ○丹羽文雄 ○八木義徳 ○秋田雨雀 ○江戸川乱歩	
○中野重治 ○森乾 ○松谷みよ子 ○井伏鱒二 ○木村義雄	
設計者の謎	15
○フランク・ロイド・ライト ○ブルーノ・タウト	
モナミあれこれ	21
モナミの思い出	23
地図からたどるモナミと街の移り変わり	25
年表	28
展示風景	35
ブックリスト	36



はじめに

中野区立中央図書館では、毎年、中野区ゆかりの人物を特集する展示を行っています。今年度の特集は、東中野のモナミに集った文化人です。

かつて、JR 中央線東中野駅の西口にモナミという洋食レストラン兼結婚式場がありました。小説家の岡本かの子の命名によるレストラン・モナミは銀座に開店後、東中野にも支店を開きます。

東中野のモナミは丹羽文雄が主宰する雑誌『文学者』の会合「十五日会」、花田清輝と岡本太郎が発起人となり総合芸術運動を掲げて発足した「夜の会」、その他、出版記念会の会場としても利用されるなど、多くの文化人に愛された交流の場でした。

本展では、モナミに集った文化人を紹介するとともに、当時の記録からモナミの実像を探ります。

モナミとは

かつて JR 中央線東中野駅の西口前（当時の住吉町）には、洋風レストラン兼結婚式場のモナミが存在した。

始まりは芝の洋菓子店白十字堂の姉妹店として銀座に開店し、昭和4年レストラン・モナミとなった。この店名をつけたのは、作家・岡本かの子（岡本太郎の母）であった。これは岡本かの子の秘書・恒松安夫とモナミ経営者の夫人が親戚関係であった縁による



▲ モナミの門。奥に建物が見える

提供：恒松龍兵氏

もので、そのためモナミのパンフレットには岡本太郎の写真が使われ、岡本かの子の小説『母子叙情』にもモナミが重要な舞台として登場している。その影響か、銀座の本店は文化人の利用が多く、後にできた東中野と新宿の支店にも多くの文化人が集うようになった。

東中野のモナミは、富豪の屋敷をレストランとして改装したもので、外観は大正期の洒落た風格ある雰囲気漂わせていたという。また敷地内には、喫茶店も併設されていた。

現在確認できている東中野のモナミの最も古い記録は、昭和22年3月10日に行われた将棋の名人戦第2局である。以降、結婚披露宴はもちろん、様々な研究会や記念会などの催



▲ モナミの外観

提供：世田谷美術館

しの記録が多く残されている。東中野のモナミで結婚式の二次会を行った仲代達矢氏は後に、「当時の知識人のたまり場」であったと回想している。他にも、城夏子著『幽霊』や、壺井栄著『月見縁』など、小説の中にも東中野のモナミが登場していることから、文化人たちにとって馴染みの場所で

あったことが窺える。またこの頃の新聞や雑誌を見ると、モナミの広告が多数掲載されていることから、その盛況ぶりを知ることができる。

それからおよそ十数年後の昭和39年2月9日、^{バクウングル} 朴雄傑著 ^{おうりよっこう} 『鴨緑江』の出版記念会が行われ、その翌年の昭和40年には地図上からモナミの記載は消えている。詳細については不明だが、おそらくこの時期に東中野のモナミはその歴史に幕を閉じたものと思われる。



◀◀ モナミのパンフレット

提供：世田谷美術館

交流の場としてのモナミ

モナミを利用していた文化人は多く、彼らの日記や年表などにその存在が散見される。それらを読むと、文学者や芸術家たちの会合、受賞パーティ、出版記念パーティ、将棋の対局場や結婚式など、実に多くの催し物に使われていたことが分かる。

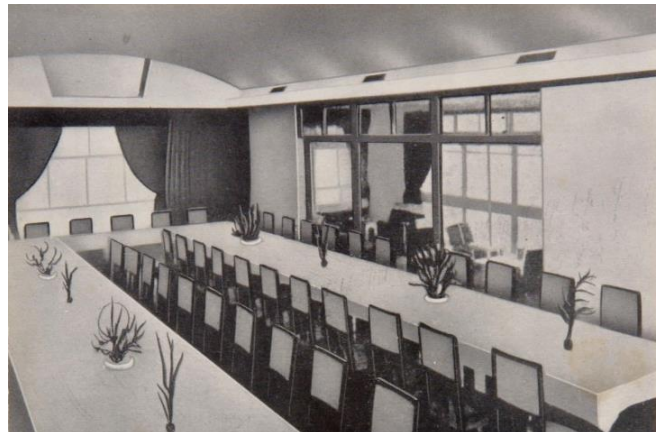


▲ 「夜の会」などの会合が行われていた広間
提供：世田谷美術館

岡本太郎と花田清輝が作った「夜の会」も、モナミを使用した。メンバーは紅茶一杯で何時間もねばり、議論に花を咲かせたという。この「夜の会」に参加していた岡本敏子は、モナミを「気どりのない、だが洗練された個人住宅風のこの近代建築」と表現している。「夜の会」に貸してもらえた静かな特別室は、「集まる人にとっては有難い贈り物」だったと振り返る。

丹羽文雄主催の「十五日会」は、昭和27年に作家の恒松恭助の世話でモナミと出会い、以来長く会場として使用した。小説家の中村八朗は、「大正期の建物の風格が十五日会によく似合った」と回想している。「十五日会」の出席者は百人近くいたが、十分収容するほどモナミは広く、風格ある建物だった。また、「夜の会」の会合のように、モナミで働くスタッフの寛容な対応があったからこそ、多くの人物に好かれ、数々の催し物で賑わっていたようだ。

長年東中野に暮らした作家・芹沢光治良氏の四女である岡玲子さんは、「モナミのお名前をよくおぼえております。父がよく話の中でモナミをいっておりましたが、私自身どんなことを話していたか記憶から遠くなってしまいました。ただ申し上げられるのは、父にとってきっとパリの「キャフェリィテレール」（文学的サロン喫茶）であったことは間違いないと思います」と語られた。



▶ 提供：世田谷美術館

夜の会

終戦後まもない時期に活発に展開された、文学と美術のジャンルにまたがる前衛芸術の研究会。昭和 23 年 6 月、発起人の花田清輝と岡本太郎を中心に、椎名鱗三、埴谷雄高、梅崎春生、野間宏、安部公房らが参加して発足した。会の名は岡本太郎のアトリエにかかっていた「夜」という絵に由来する。この研究会では、東中野のモナミを会場として、「リアリズム序説」「対極主義」「反時代精神」「創造のモメント」といった研究発表を軸に、アヴァンギャルド芸術をめぐる熱い討論が交わされた。

また、同年 9 月に若手芸術家が中心を占めた「アヴァンギャルド芸術研究会」が形成されるなど、「夜の会」を起点とした多くの芸術運動が分岐していった。「夜の会」には、メンバー表も規約も会費もなく、モナミで開催するときには、新聞などで告知をして、来たい人が自由に参加するスタイルをとっていた。この会の一員であった批評家の針生一郎や瀬木慎一らは、後年の諸著作で「夜の会」を回顧している。

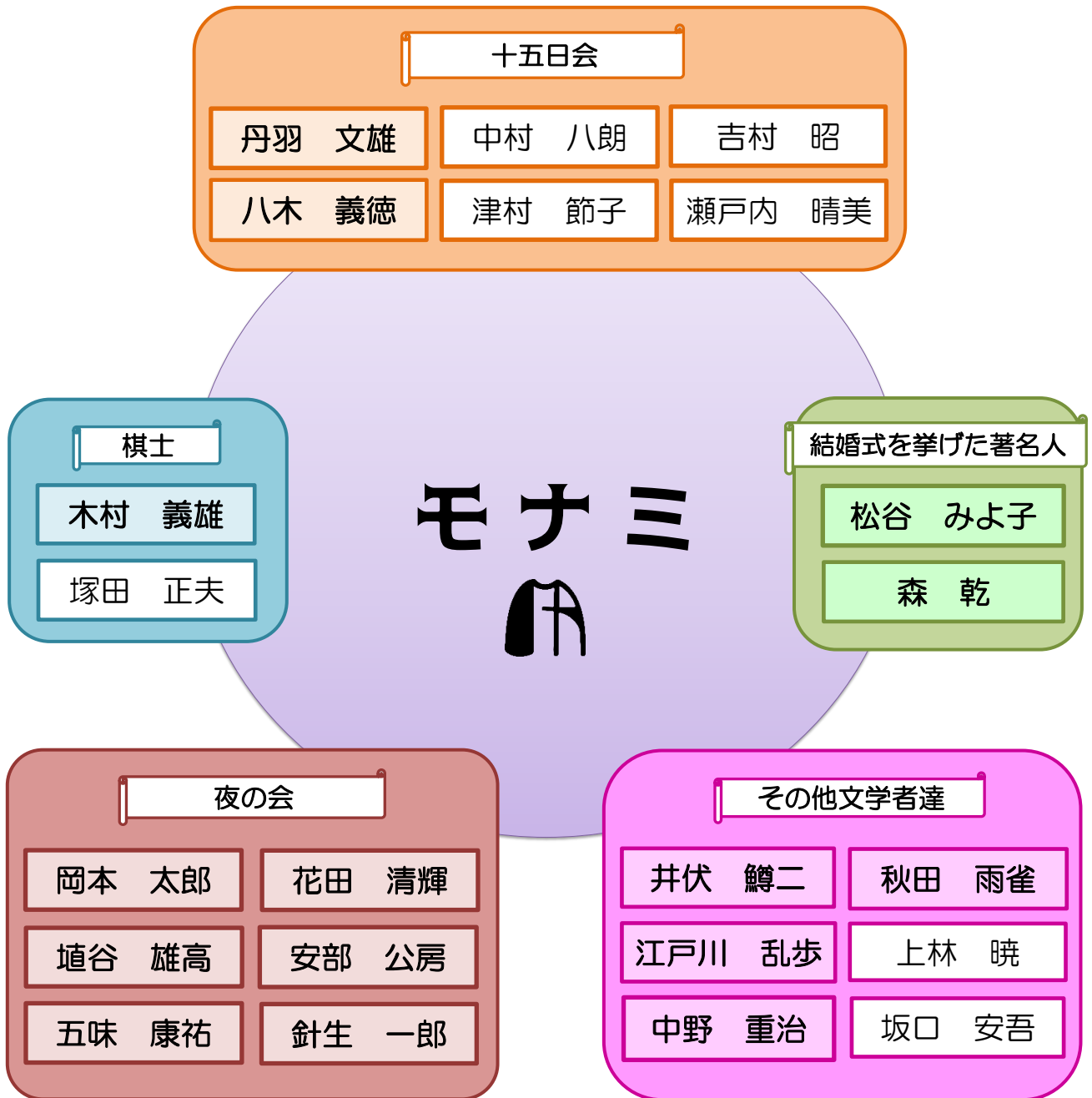
十五日会

戦後、多くの作家を送り出した丹羽文雄主宰の「十五日会」。これは戦前、丹羽文雄、石川達三、火野葦平、田村泰次郎という早稲田の先輩達と中村八朗ら学生との間で開かれていた文学研究会「五日会」が始まりであった。

終戦後「五日会」に加わった石川利光らに、丹羽から新しい会を作ってはどうかという話があり、「誰でも気儘に出席できる開放的な会」にしようとして石川が世話人となった。会合には丹羽文雄らの先輩作家にも出席して貰うため、原稿のメ切の関係で十五日に原則的に集まろうと、昭和 23 年、「十五日会」として発足した。

毎月、丹羽が創刊した『文学者』に載った小説作品について、先輩後輩入りまじって忌憚のない批評を活発に取り交わしていたが、人数も増え、会場も有楽町のレバンテ、リッツから東中野のモナミに移り、毎回百人を越す大所帯になった。「十五日会」は昭和 30 年 12 月に終わりをつけた。

モナミを取り巻く人々



※色付きの人物は解説あり

おかもと たろう
岡本 太郎

明治 44(1911) 年 2 月 26 日～平成 8(1996) 年 1 月 7 日

芸術家・評論家。父は漫画家の岡本一平、母は小説家の岡本かの子。母の実家の神奈川県橘樹郡高津村二子（現川崎市）生まれ、港区青山育ち。昭和 4 年、東京美術学校在学中に渡欧、パリ大学に学ぶ。ピカソの作品に接して前衛芸術に目覚めた。大阪万博の「太陽の塔」や、渋谷駅の壁画「明日の神話」などの衝撃的な作品を残し、84 歳で死去。

昭和 22 年、花田清輝に出会い意気投合し、二人で新しい芸術運動を起こそうと、翌 23 年「夜の会」を結成する。母の縁で元より親交のあった太郎がモナミとかけあって無料で会場を借り、月 2 回の例会の予約もしたという。「夜の会」は短命であったが、花田との友情は、花田が亡くなるまで変わらず、夜の会を通じて親しくなった敏子（旧姓平岡）とは生涯のパートナーとなった。



◀◀ モナミでの会合風景

左写真、手前の人物が岡本太郎

提供：川崎市岡本太郎美術館



はなだ きよてる
花田 清輝

明治 42(1909)年 3 月 29 日～昭和 49(1974)年 9 月 23 日

評論家・小説家・劇作家。福岡県福岡市出身。昭和 4 年京都帝国大学文学部英文科に入学するが、翌年父の会社が倒産し、6 年には授業料不納のため除籍される。8 年から東京で困窮の中に執筆や編集業を行う。16 年から 18 年にかけて『復興期の精神』を発表、22 年刊行した。戦後は文学から美術、映画評論に手を広げ、37 年『鳥獣戯話』で毎日出版文化賞。49 年、脳出血のため 65 歳で死去。

組織作りに長けた花田が関わった団体は「夜の会」、「アヴァンギャルド芸術の会」、「記録芸術の会」、「新日本文学会」、「近代文学」とモナミを使ったことがある団体が多く、花田にとってなじみのある場所であったはずである。「夜の会」で行った発表の中では「リアリズム序説」が活字で残っている。

はにや ゆたか
埴谷 雄高

明治 42(1909)年 12 月 19 日～平成 9(1997)年 2 月 19 日

小説家・評論家。台湾の^{しんちく}新竹出身。本名^{はんにや}般若豊。大正 12 年、東京に移住。昭和 3 年日本大学予科に入学し 5 年に退学。7 年共産党の活動で逮捕され、新井にあった豊多摩刑務所に 1 年余収監される。この時構想した「死霊」を、戦後佐々木基一らと創刊した『近代文学』に掲載し、以後書き続けたが未完のまま、87 歳で死去。昭和 45 年『闇のなかの黒い馬』で、谷崎潤一郎賞を受賞した。

「夜の会」で、花田清輝と特に影響しあい、互いに対の小説を書く約束をしている。紅茶一杯で 3、4 時間も置いてくれるモナミの支配人には好感を持っていたようで、昭和 23 年の『死霊』の出版記念会もモナミで行われた。「夜の会」では、記録が残っている「反時代精神」以外に「悪魔について喋った」と語っている。

あ べ こうぼう
安部 公房

大正 13(1924)年 3 月 7 日～平成 5 (1993) 年 1 月 22 日

小説家・劇作家。東京府北豊島郡滝野川町（現東京都北区）出身。本名安部^{きみふさ}公房。

昭和 23 年東京大学医学部卒業。著作に『砂の女』『箱男』など。68 歳で死去。

昭和 22 年 12 月、「夜の会」の最初の会合に詩人の関根弘とともにオブザーバーとして参加した。翌年 1 月「夜の会」が正式に発足され、モナミを中心に芸術家たちの公開討論会が行われた。23 年 9 月 20 日に安部は「創造のモメント」をモナミで報告。討論会では、安部が自身の考える創造や芸術家について岡本太郎らと討論し合った。「夜の会」の討論会の内容は、翌年『新しい芸術の探求』という題の書籍にまとめられた。

昭和 32 年 5 月 19 日、モナミで多様な芸術ジャンルの交流を目的とした「記録芸術の会」の第 1 回総会を開催し、安部は映画制作を通して新しい芸術のあり方を模索した。モナミと縁深い文化人の 1 人である。

ご み やすすけ
五味 康祐

大正 10(1921)年 12 月 20 日～昭和 55(1980)年 4 月 1 日

小説家。大阪府大阪市南区難波町（現中央区難波）出身。昭和 17 年第二早稲田高等学院中退、明治大学文芸科に入るが、応召により中退。昭和 27 年『喪神』を発表した後、剣豪作家として活躍した。著作に『柳生連也斎』『柳生武芸帳』など。練馬区立石神井公園ふるさと文化館に五味康祐の展示室がある。多趣味な作家でもあり、オーディオやマージャン、占いに造詣が深かった。58 歳で死去。

昭和 23 年の「夜の会」のスポンサーは、岡本太郎の才能に惚れ込んだ奈良の三興出版社だった。剣豪作家として有名になる前、五味はこの出版社の担当委員として、同年 3 月から「夜の会」に出席。約半年間会計係として「夜の会」の費用を支払っていた。関根弘は自伝の中で「(五味は)黒い着物に黒い袴をつけて、オッカナイ顔をして会場の一隅にいた。」と振り返った。

はりう いちろう
針生 一郎

大正 14(1925)年 12 月 1 日～平成 22(2010)年 5 月 26 日

評論家。宮城県仙台市出身。昭和 23 年東北帝国大学文学部国文学科卒業。28 年東京大学文学部美学特別研究生修了。和光大学名誉教授、丸木美術館館長、美術評論家連盟会長など歴任した。芸術、社会・思想状況に対して批評をおこなった。著作に『戦後美術盛衰史』、『わが愛憎の画家たち』など。84 歳で死去。

昭和 23 年 6 月以降に花田清輝、岡本太郎、野間宏らの「夜の会」に参加し、批評家としての素地をつくった。当時の下宿のすぐ近所にモナミがあったので、欠かさず出席したという。

モナミで安部公房と関根弘を知り、彼らがつくった芸術運動「世紀の会」に参加。しかしその後、針生は東京大学の研究室へ勤め始めたため、途中で脱退した。

にわ ふみお
丹羽 文雄

明治 37(1904)年 11 月 22 日～平成 17(2005)年 4 月 20 日

小説家。三重県四日市市出身。寺の長男として生まれる。早稲田大学在学中に小説を書き始め卒業後帰郷するも、昭和 7 年「鮎」が『文藝春秋』に掲載され、上京。10 年に結婚し中野区文園町（現中野 6 丁目）に 3 年ほど住んだ。多作で受賞も多く、文壇でも重職を務め、文壇きっての美男でもあった。代表作に『菩提樹』『親鸞』『蓮如』など。認知症を患い、63 年活動停止、満 100 歳で死去。

昭和 25 年『文学者』を創刊し、私費を投入して後進育成に励む。27 年からモナミを合評会の場とした。吉村昭、津村節子、瀬戸内晴美（寂聴）らが育ち、それぞれに華やかな会の様子を書き残した。津村は「メインテーブルの中央に先生が着かれ、左右に著名な作家が並んでいる光景は、まばゆいばかりであった。」と振り返っている。

やぎ よしのり 八木 義徳

明治 44(1911)年 10 月 21 日～平成 11(1999)年 11 月 9 日

小説家。北海道室蘭市大町（現中央町）出身。北海道帝大水産専門部時代に左翼思想に傾倒するが、当局の左翼学生弾圧により、自主退学。昭和 9 年横光利一に師事。13 年早稲田大学文学部仏文科卒業。著作に『劉広福』『私のソーニャ』『摩周湖』など。88 歳で死去。

昭和 23 年 4 月 15 日に中村八朗に誘われて、有楽町で開かれた第 1 回「十五日会」に参加。



25 年 7 月、「十五日会」内の早稲田大学文学部を昭和 9 年から 13 年に卒業した作家たちと、「十日会」を設立した。「十五日会」の定例会場となったモナミで、毎月 10 日に「十日会」の会合も開催された。八木は、仲間たちとモナミで「勝手なおしゃべり」を交わしていたと振り返っている。

▲ モナミの室内
提供：世田谷美術館

あきた うじゃく 秋田 雨雀

明治 16(1883)年 1 月 30 日～昭和 37(1962)年 5 月 12 日

劇作家・小説家・児童文学作家・社会運動家。青森県南津軽郡黒石町（現黒石市）出身。本名秋田徳三。東京専門学校（現早稲田大学）在学中に詩集を刊行し、卒業後は主に小説家として活動。明治末から劇作、大正半ばから童話を手掛けるなど幅広く活躍した。昭和 9 年には、今に続く演劇雑誌『テアトロ』を創刊。私生活では、妻二人、娘、孫娘に先立たれ苦勞が多かった。79 歳で死去。

モナミは昭和 26 年から 34 年の 8 年間の日記に 11 回登場し、演劇人にも使われていたことがわかる。彼の 70 歳の誕生日パーティーは、生誕 70 年記念行事の一つとして、モナミで盛大に行われた。プロレタリア運動やエスペラント語の方面にも親交があったため、日ソの各界より約 200 人が集い、朗読や合唱、幻燈を楽しんだ。

えどがわ らんぼ
江戸川 乱歩

明治 27(1894)年 10 月 21 日～昭和 40(1965)年 7 月 28 日

推理作家。三重県名賀郡名張町（現名張市）出身。本名平井太郎。大正 5 年早稲田大学政経学部卒業。貿易会社、ラーメン屋などさまざまな職を転々とし、大正 12 年『二銭銅貨』でデビュー。『D 坂の殺人事件』などを発表して、作家として認められる。日本における推理小説というジャンルを築いた第一人者。日本推理作家協会初代理事長。その他の著作に『屋根裏の散歩者』『人間椅子』など。70 歳で死去。

昭和 26 年 10 月 20 日、乱歩はモナミにて推理小説の驚異やトリックについて「探偵小説漫談」を、同日中野警察大学校において「探偵小説の犯罪動機」というテーマを扱い、一日で中野を中心に複数の講演会を催した。

なかの しげはる
中野 重治

明治 35(1902)年 1 月 25 日～昭和 54(1979)年 8 月 24 日

詩人・小説家・評論家。福井県坂井郡高椋村（現坂井市）出身。第四高等学校在学中より旺盛に活動する。昭和 2 年、東京帝国大学文学部卒業。プロレタリア文学に傾斜し、6 年共産党に入党。7 年治安維持法違反により豊多摩刑務所に収監され、9 年出所。敗戦後、再び入党し、22 年から 3 年間同党の参議院議員を務めたが後に除名された。昭和 30 年『むらぎも』毎日出版文化賞、44 年『甲乙丙丁』で野間文芸賞など。76 歳で死去。

日記には頻繁にモナミが登場し、昭和 39 年 2 月までは出版記念会が行われていたことが確認できる。34 年には、8 年に検挙され獄中死していたことが判明した友人、西田信春を偲ぶ会を主催し、モナミで行った。会費は全て払ってくれた人がいたようだ。

もり けん
森 乾

大正 14(1925)年 3 月 1 日～平成 12(2000)年 5 月 30 日

早稲田大学社会科学部教授・フランス文学者。東京都出身。旧姓金子。詩人の金子光晴と森三千代の長男。昭和 26 年早稲田大学文学部英文科卒業。32 年早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士課程修了。父の評伝『父・金子光晴伝 夜の果てへの旅』、外国文学の翻訳『沈黙のたたかい』（ヴェルコール著）が主な著作活動だった。息子を兵役に取られたくない父・光晴の思惑により、乾は松葉で燻されて肺炎を患い、診断書を提出。出兵することなく終戦を迎えた。75 歳で死去。

昭和 38 年 6 月 17 日に井上登子と結婚。同年 12 月 9 日に披露宴をモナミでおこなった。会場がモナミとなったのは、登子の兄・井上隆明が八木義徳に伴って訪れた「十五日会」の定例会場がモナミだった縁があったためである。体調の思わしくなかった母・三千代を父・光晴が支えながら出席し、父の弟子たちに囲まれた披露宴だった。

余談ではあるが、父・光晴は昭和 39 年の春に桜井滋人らと同人雑誌の顔合わせにモナミを選んだ。同人雑誌『あいなめ』が創刊されたのはその翌年である。

まつたに みよこ
松谷 みよ子

大正 15(1926)年 2 月 15 日～平成 27(2015)年 2 月 28 日

児童文学作家。東京市神田区元岩井町(現千代田区岩本町)出身。本名松谷美代子。昭和 17 年東洋高等女学校卒業。21 年に坪田譲治に出会い、それ以来 30 年師事。23 年、雑誌『童話教室』に「貝になった子供の話」が掲載される。著作に『モモちゃんとアカネちゃん』シリーズ、『ふたりのイーダ』など。89 歳で死去。

昭和 26 年 11 月 5 日、童話集『貝になった子供』を処女出版し、翌年 1 月 6 日に東中野のモナミで出版記念会が催された。

昭和 30 年 11 月 13 日に民話研究家の瀬川拓男と結婚式を挙げたのもモナミであり、坪田譲治夫妻が仲人役をつとめた。式場では人形劇や朝鮮舞踊が催され、友人作のウェディングドレスを身にまとい、「友情に包まれた出発だった」と振り返っている。

井伏 鱒二

明治 31(1898)年 2 月 15 日～平成 5(1993)年 7 月 10 日

小説家。広島県安那郡加茂村（現福山市）出身。早稲田大学に進学し創作を始める。大正 11 年に本意ではなかったが退学、在野で創作を続ける。昭和 2 年から杉並区で生涯を過ごす。4 年から開いた「阿佐ヶ谷将棋会」は、後に「阿佐ヶ谷会」として、中断を挟んで昭和 40 年代まで、中央線沿いに住む文士の交流の場となった。この様子は 57 年刊行の『荻窪風土記』に詳しい。代表作に『ジョン万次郎漂流記』、『黒い雨』、『山椒魚』など。95 歳で死去。

雑誌『ホープ』の企画で、モナミを会場に中央線文士の一人である上林 暁^{かんぼやしあかつき}と対局し、漫画家の清水崑^{こん}がそれをスケッチした。この企画は、モナミで将棋の名人戦が行われた記憶の新しい頃に行われたため、支配人が彼らを棋士と勘違いしたというエピソードを書き残している。

木村 義雄

明治 38(1905)年 2 月 21 日～昭和 61(1986)年 11 月 17 日

将棋棋士、第 14 世名人。東京都本所区（現墨田区）出身。下駄屋の次男。幼少より頭角を現し、大正 5 年、関根金次郎に入門する。昭和 10 年に名人が家元制から実力制に改まった後、12 年に行われた名人戦を勝ち抜いて初の名人となり、以降名人位を守る。22 年第 6 期名人戦で失冠するが、24 年 8 期には復位、27 年 11 期で敗北するまで防衛した。同年一線を退いて後は朝日新聞の将棋欄を担当した。81 歳で死去。三男も棋士となった。

昭和 22 年、塚田正夫と戦った名人戦のうち数局がモナミで行われた。これが東中野のモナミが確認できる最初である。坂口安吾が

「夜の九時ころ、塚田が長考してゐる時、彼は記録係へ「応接間へよびに来てね」と云ひ残し、薄暗い応接間の肱懸椅子^{ひじかけ}にグッタリのびてゐた。」と書いている。



▲ モナミの和室

提供：世田谷美術館

設計者の謎

モナミはフランク・ロイド・ライトの建物か？

当時モナミに集った人々の著作などには、“フランク・ロイド・ライトの設計”という記述がしばしば見られる。数は少ないが“ブルーノ・タウトの設計”としているものもある。

ところが、両者の資料にあたっても、裏づけとなるものがまったく見つからない謎多き建物なのである。

モナミになる前は？

昭和8年の火災保険特殊地図（当館資料名『中野区全域図』）には中野区南部が現在の住宅地図に近い形で記録されており、一部の住宅は居住者の名前も確認できる。モナミの位置を確認すると、「木部」邸が建っていることがわかる。

東中野に住んでいた久志卓真氏の著書『骨董遍歴』（昭森社、1963）では「今モナミになっている、元木部さんの住んだライトが親しく建築したモダン住宅」と建物について紹介している。また、昭和45年5月15日付『中央新聞』「近代中野区社会文化史 中野区の今昔」というコラムの中でも、モナミが木部邸であったことに言及しており、木部邸＝モナミ、ということは間違いなさそうである。

木部邸

ライトの建築作品について調査を進める中で、ライト研究家で兵庫県立大学准教授の水上優氏に伺ったところ、木部邸はライトの設計ではないと思うとのことであった。そして、日本におけるライトの影響に詳しい建築士・建築史家の井上祐一氏をご紹介いただいた。井上氏によれば、未確認ながらライトの弟子である遠藤^{あらた}新の作品ではないか、という。そこで、井上氏と、遠藤新の次男・遠藤楽氏、三男・陶氏とともに働かされていた建築士の宮井昭隆氏にお話を伺う機会をいただいた。

— 遠藤新と木部氏の関係

宮井氏メモ

- ①1980（昭和55）年2月9日 遠藤楽氏より聞き取り
既に取り壊されている。東中野駅の近くに「モナミ」と名を変えてあった。
- ②1984（昭和59）年6月21日 遠藤楽氏より聞き取り
目白遠藤楽事務所で遠藤楽氏より星島光平氏に電話で確認。
木部さんは星島さんの親戚。
- ③1994（平成6）年9月7日 遠藤楽氏より電話あり
木部さんの奥様は山邑太左衛門夫人の姉上様。

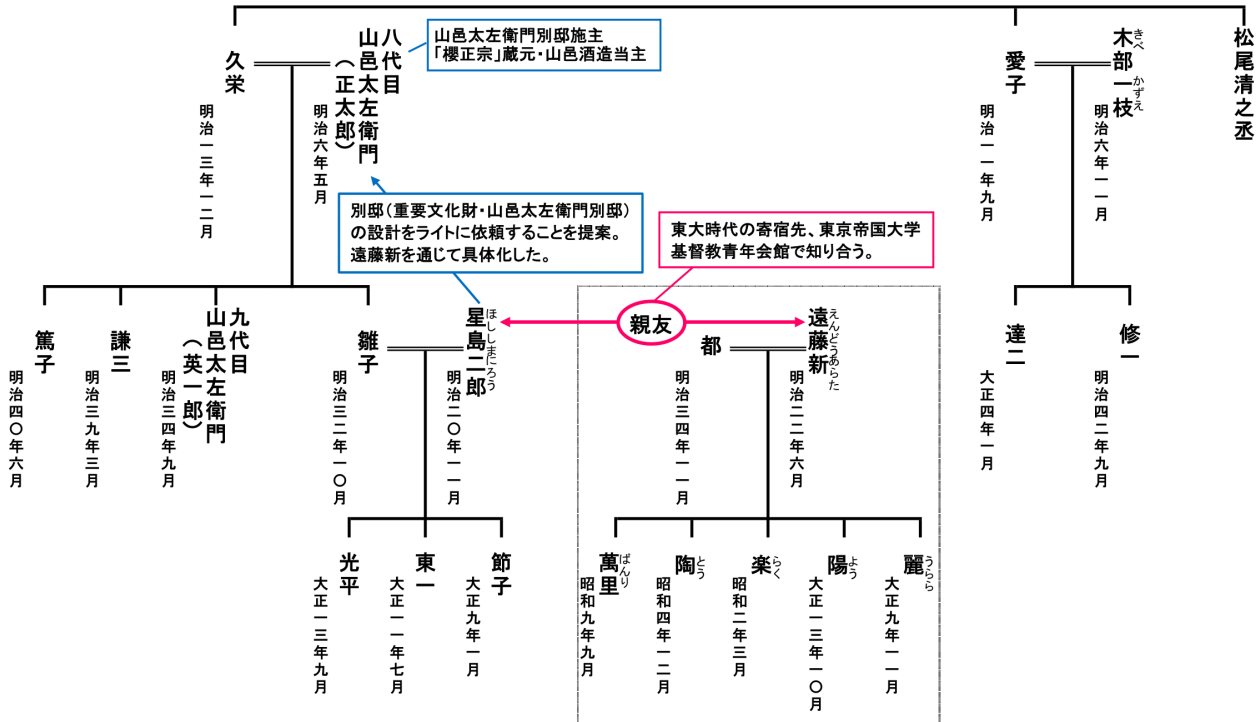
井上氏メモ

1994年9月20日 星島節子氏談
木部修二（※修一）は、山邑太左衛門の夫人の姉の主人である。
星島二郎の叔父にあたる。

井上氏「星島光平氏と星島節子氏は、衆議院議長も務めた星島二郎のご子息・ご息女であり、星島二郎と遠藤新は親友でした。そして、星島二郎の妻が山邑太左衛門別邸の施主・八代目山邑太左衛門の長女です。この別邸は、ライトの基本設計で遠藤新と南信がつくったという関係にあります。

したがって、木部氏の妻が誰か分かれば、遠藤新との繋がりがはっきりするのではないかと思います。」

これらの情報をもとに、山邑家と木部家について調査をしたところ、大正10年の『人事興信録（第6版）』により、八代目山邑太左衛門の妻・久栄の姉が木部一枝の妻・愛子であることが分かった。



——遠藤新とは

遠藤新は福島に生まれ、仙台の第二高等学校を経て東京帝国大学建築科に進学。在学中にライトを知り、当時から機会があれば彼の下で学びたいとの思いがあったようである。ライト設計の帝国ホテル建設に携わった後、1922（大正11）年遠藤新建築創作所を設立。国の有形文化財となっている甲子園ホテルや、満州中央銀行倶楽部などを設計し、中野区内には山本節次郎邸を残している。

——木部邸＝モナミはどんな建築だったか？

まづ地所を見る

地所が建築を教へて呉れる

いかに建築が許されるか

いかに生活が許されるか

そしていかに生活が展びられるか

其をその自然から學ぶ。(略)

『婦人之友』1924年5月号「住宅小品十五種」遠藤新

宮井氏「遠藤新の作品は、建物でも敷地でも案内板なしに人が自然に動いて目的地にたどり着ける、と言われた方がいますが、私もそう感じます。遠藤は建物の配置に非常に力を注いだ人でした。見える限りが敷地であり、その自然の中に建物がある。建築は建物だけで存在しているのではないのだ、という考え方を大切にしていました。」

井上氏「建物を敷地の一番いいところに建てるのではなく、できるだけ隅の方に建てて室内から全体を見渡せるようにする、という建て方が多いです。調査で実際に訪問すると、居心地のいい、心が安らぐ家がほとんどでした。」

当時のモナミを知る方のお話でも、広い庭であった印象があるという。夏になると庭がビアガーデンになったというから、敷地のうち庭が広くとられていたはずだ。そして、多くの文化人が利用したのも、建物の持つ、居心地のよさにあったのかもしれない。

さらに、モナミになってからの数少ない写真で確認できる建築様式から、大正の末から昭和3年頃までの遠藤新のプランであると判断できるという。

井上氏「張り出した壁の真ん中に縦長の窓がある、建具に棧が下の方だけ入っている、というのは遠藤の他の作品にも見られます。」

宮井氏「軒下からすぐに窓があるところや、特徴的な石積みから遠藤作品とわかります。」

——木部邸であった時期

モナミの前身、木部邸の施主であったとみられる木部一枝は、奈良県生まれ。明治31年東京大学卒業後に古河鋳業に入社し、阿仁鋳業所長などを務める。大正8年当時足尾鋳業所所長だった一枝は、労働組合の要求を受け入れようとしたことで会社の不興を買い、10年辞職させられた。当時の新聞によれば温厚な学者肌であったという。その後、大正の終わりから昭和の初めに東中野に移り、各社の重役を務めながら昭和12年に亡くなった。彼の死後、14年には長男修一は他区に移っているため、木部一家がこの邸宅に住んでいたのは約15年間ということになる。

終わりに

前出の『骨董遍歴』によれば、木部氏の後の住人は強制疎開で転住している。住人がいなくなったと思われるこの建物は、しかし結局近隣の中で唯一焼けず、建物疎開もまぬがれ、正式な開業年や経緯はわからないものの昭和 22 年にはモナミとして姿を現すことになる。

星島二郎は遠藤新に多数の建築設計を依頼したとともに、施主を紹介しているという。遠藤陶氏も「父の初期の仕事にも星島先生が関わって下さった仕事がいいろいろとありました。犬養木堂邸、木部邸、そしてまた、甲子園ホテルの建設にも大きな助力を頂いたようです。」と書き記している。

木部邸＝モナミの建物も、星島が親戚である木部氏に遠藤を紹介してつくられたものとみてよいだろう。

遠藤新はライトが帝国ホテルを手掛けた際、念願叶ってチーフアシスタントを務めた。ライトも遠藤を「MY SON」と呼び、帰国まで傍から離さなかった。開戦時にはアメリカへの移住を勧め、終戦の翌々年には、マッカーサーを通して、遠藤らに送金している。遠藤はライトより早く亡くなり再会は叶わなかったが、師弟の絆は終生変わらなかったようだ。

残っていれば、遠藤新作品として、東中野で戦災をまぬがれ焼け残った建築物として、貴重な作例となっただろうモナミ。今や終わりの様さえわからないのは残念だ。



◀モナミの玄関

▲モナミの広間

提供：世田谷美術館

フランク・ロイド・ライト

1867（慶応2）年6月8日～1959（昭和34）年4月9日

建築家。アメリカ・ウィスコンシン州出身。ジョセフ・ライマン・シルスビーやルイス・サリバンの建築事務所で勤務した後、26歳で独立。1909年に建てたシカゴのロビー邸を代表とする、低めで建物の水平線を強調したプレイリースタイル（草原様式）と呼ばれる住宅建築で名前が知られるようになる。以後「落水荘」や「グッゲンハイム美術館」など多くの傑作を残し、近代建築三大巨匠の一人と称される。91歳で死去。

ライトはシカゴ万博の際、日本館鳳凰殿に感銘を受けて以来日本文化に興味を示し、その影響が建築にも見られる。日本には旧帝国ホテルの一部、自由学園明日館、旧山邑家住宅がライトの建築として現存している。また、浮世絵の収集家としても有名。

ブルーノ・タウト

1880（明治13）年5月4日～1938（昭和13）年12月24日

建築家。ドイツ・東プロイセン・ケーニヒスベルク出身。ケーニヒスベルク土木建築学校卒。1909年、ベルリンで建築事務所を持つ。1914年、工芸展で建てた「ガラスの家」で注目を浴び、ドイツを代表する建築家として数々の建築に携わる。1933年、ナチス政権に追われたタウトは、日本の建築団体より誘いを受け来日。3年半日本に滞在した。1936年、日本ではできなかった設計や建築の仕事に専念するためトルコに移住。58歳で死去。

タウトは、来日してすぐに訪れた桂離宮に大きな感銘を受けた。滞在中、日本の伝統美術の研究に従事したことで、「日本美の再発見者」と称され、『日本文化私観』『日本の芸術』など日本に関する著作も多く残した。しかし、日本でタウトが手掛けた建築は、旧日向別邸のみとなっている。

モナミあれこれ

「モナミ」はどのような建物だったのか、また設計者は誰なのか。当時を知る人々が、人づてに聞いた話、憶測、印象など、様々な「モナミ」についての記憶を書き残している。

松村さんは東中野の西北口の今モナミになっている、元木部さんの住んだライト（帝国ホテルを建てた）が親しく建築したモダン住宅に住んでいたのですが、強制疎開で、永田さんを通して私の家へ転住されたのである。

『骨董遍歴』久志卓真/著，昭森社，1963年

帝国ホテルの設計者ライトが建築されたという駅前の木部修吉邸跡も改造され、フランス料理「モナミ」となり、結婚式場その他に利用されていた。

「近代中野区社会文化史 中野区の今昔（7）」中谷千章（『中央新聞』昭和45(1970)年5月15日）

モナミは富豪の屋敷をレストランにしたものだ。旧帝国ホテルの設計者ライトが設計したもので、大正期の建物の風格が十五日会によく似合った。

『文壇資料 十五日会と「文学者」』中村八朗/著，講談社，1981年

東中野駅のプラットフォームに立つと、中野方面に向かって線路の右側に沿って、かなりの大きさをレストランモナミがあった。昭和三十二、三年頃、なかなかモダンで落ち着いた店構えであった。大広間の他に小さな個室がいくつもあって、フランス料理が出るので、確か結婚式場でもあったと思う。

『私の東京物語』中山愛子/著，海竜社，1988年

岡本太郎は意外に組織者だった。マメでもあった。母親のかの子が名づけ親である銀座の「モナミ」の主人に掛けあって、彼が東中野にひらいていた洒落たレストラン（ブルーノ・タウト設計）の一室を、月二回、無料で借りられることにしたのである。

『岡本太郎に乾杯』岡本敏子/著，新潮社，1997年

“モナミ”は、富豪の屋敷をレストランに改装したもので、帝国ホテルと同じライトが設計したというだけあり、大正期の雰囲気のある漂う風格のある建物であった。

『瑠璃色の石』津村節子/著，新潮社，1999年

岡本太郎は母かの子の小説「母子叙情」（1937年3月）の舞台でもあり、かの子が名付け親である銀座の〈モナミ〉の主人にかけあって、東中野にひらいていたレストラン〈モナミ〉を月二回の月曜の午後、無料で借りられるようにした。（略）ブルーノ・タウト設計の洒落たレストランに、よれよれの服装の男たちや学生たちが出入りした。

『安部公房・荒野の人』宮西忠正/著，菁柿社，2009年

モナミの思い出

大正期の建物の風格を漂わせていたというモナミ。多くの文化人が行き来したそのレストランは、近所に住んでいた方々の記憶にも残っている。

いしむろや まさあき
石室屋 政昭 氏（東中野駅前通商和会会長）

子どもの頃、モナミの前の道でよく遊んでいました。まだ今の道幅の半分でしたけど、アスファルトだったので山手通りのある坂の上から日本橋の方まで、ローラースケートでバーっと滑り降りていました。

門の前には車止め。門を入ると左手に芝生の庭があって、奥に建物があって。敷地の外れ、門の右手には喫茶部がありました。建物は昔の帝国ホテルのような渋くて重厚な感じでしたよ。

夏になると庭はビアガーデンになって、夕涼みの音楽、ハワイアンとかが流れていました。僕はまだ子どもだったから中には入れなかったけど、ビールなんかを飲む様子を垣根の間から覗いて見ていました。「あ、やってるやってる。」なんて感じでね。

周りの建物とは全然違う雰囲気でした。とにかく僕たちみたいな子どもにはなかなか入りにくい高級な感じがしましたね。



▶ モナミ入り口の看板
ビアガーデンの看板も出ている
提供：世田谷美術館

こまえ ようこ
小前 洋子 氏（陶芸家）

利用したのは喫茶部のみです。まだ文字もよく読めない年齢だったので、メニューの内容は分からず、緑色のクリームソーダを飲んでいました。サンドイッチも食べたような。親はコーヒーで。

坂道なので、今も石を積んでありますが、あれは当時のものではないのでしょうか。道路より数段階段があって、中は大きな椰子か棕櫚しゅろの植木鉢があり、ビーチパラソルがあって、南国風な感じでした。床は木で、油が塗られてその油の臭いがきつかった思い出があります。

門に向かって右手に喫茶部。喫茶部は後に美容院になったと思います。何回か行きました。

子どもながらに外国の様だった特別な印象です。敷地の奥も冥界の様な、子どもの探検にはちょうどいい雰囲気でした。



▲ モナミ喫茶部外観

提供：世田谷美術館

沢野 ひとし「神田川」より

僕が小学校の頃の遊び場所は、東中野にあったモナミという西洋料理店の裏庭であった。モナミはその当時活躍していた文化人のたまり場で、とりわけ作家、編集者たちが出版パーティーなどで利用していて、人気のあった店である。店の中は落ち着いた油絵が飾られ、窓には白いレースのかかった上品な雰囲気の店であった。そのモナミでコックをしている人の子供の小田切君が僕とクラスが同じであったために、僕は年中モナミの裏庭で遊んでいた。

(引用：『沢野ひとしの少年少女絵物語』本の雑誌社，1986年)

地図からたどるモナミと街の移り変わり

戦前、東中野は井出海軍大将など名家の邸宅が多いお屋敷街だったが、空襲で一度街の大部分が焼けてしまった。しかし昭和30年代になると、不動産屋街と言われるほど多くの不動産屋や商店が集まるにぎやかな街になる。特に東中野駅の西口付近は、車も満足に通れないほど道幅が狭く、雨の日には他人の傘のしずくで肩が濡れるほど混雑したという。ちょうどこの頃の地図から、木部氏の邸宅だった場所に「モナミ」が姿を現す。実際建物が「モナミ」となったのは戦後すぐと考えられるが、それが確認できる地図資料は現在見つかっていない。

昭和40年になると「モナミ」の表記は地図上から消える。地図だけを見ると、「モナミ」は10年も経たぬ間に姿を消してしまったことになる。「モナミ」の他にも、駅前の土地が整備されるなど街の様子は刻々と変わっており、戦後の街の慌ただしさを窺うことができる。



▲ 昭和42年9月 東中野駅前予定地
提供：中野区



▲ 昭和45年 東中野駅前
提供：中野区

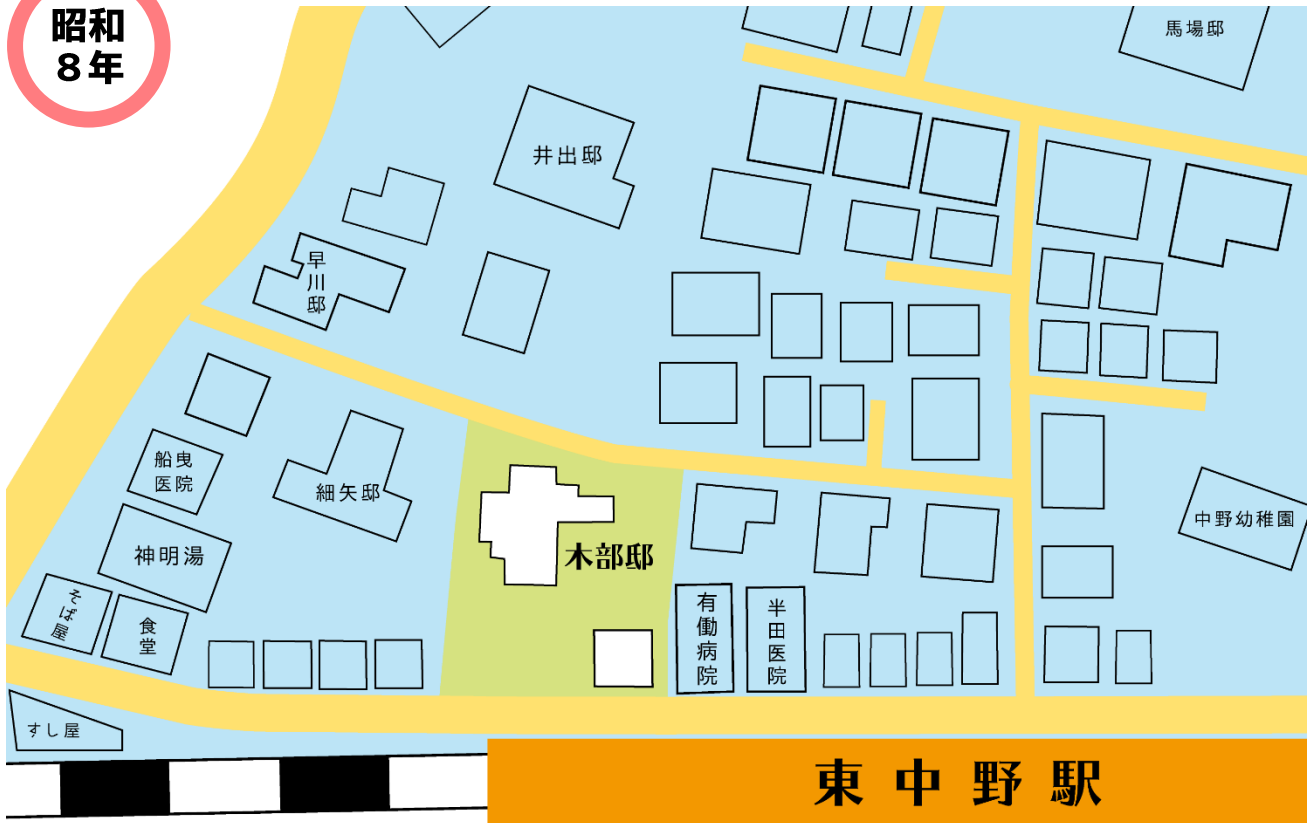


▲ 昭和44年6月 東中野駅前マーケット跡地
提供：中野区



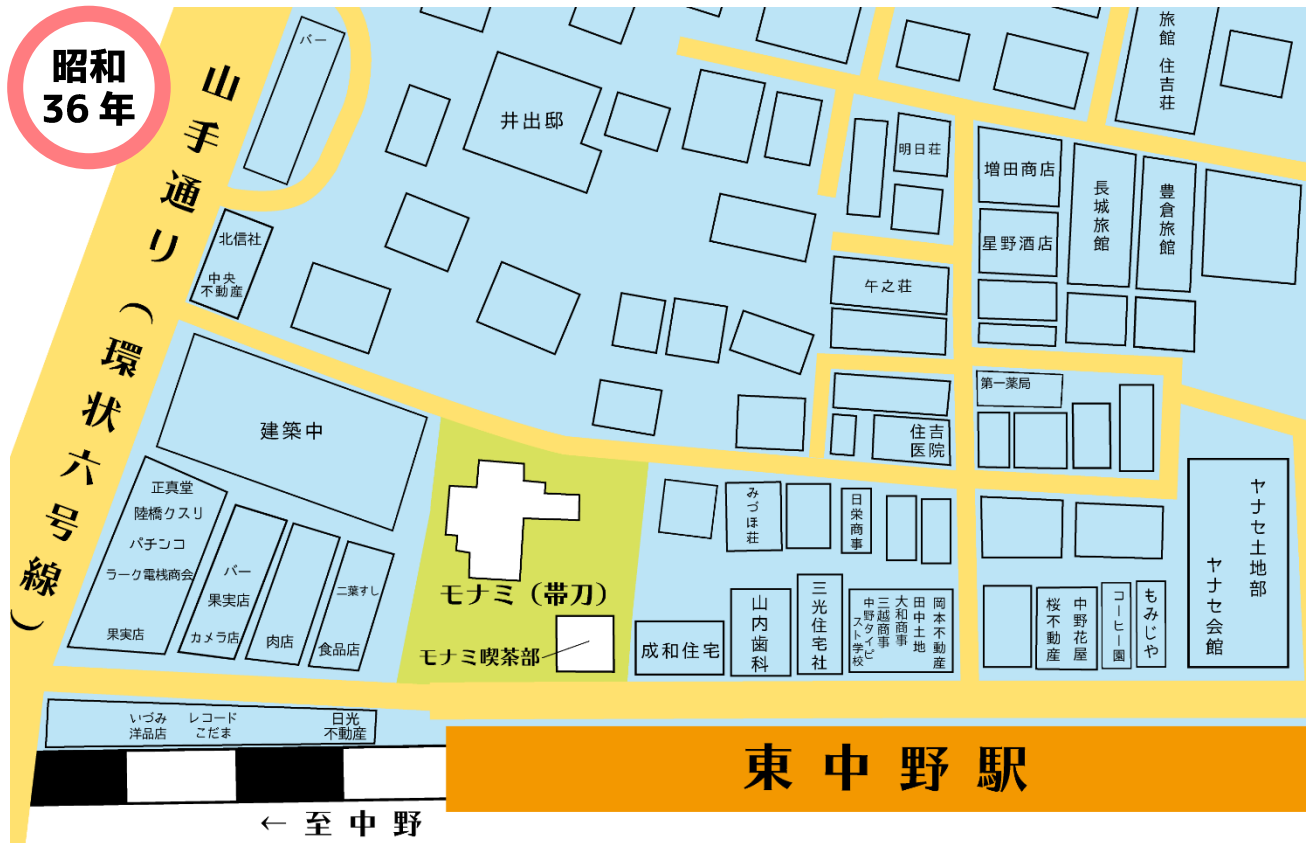
▲ 昭和44年7月 東中野駅前マーケット跡地
提供：中野区

昭和
8年



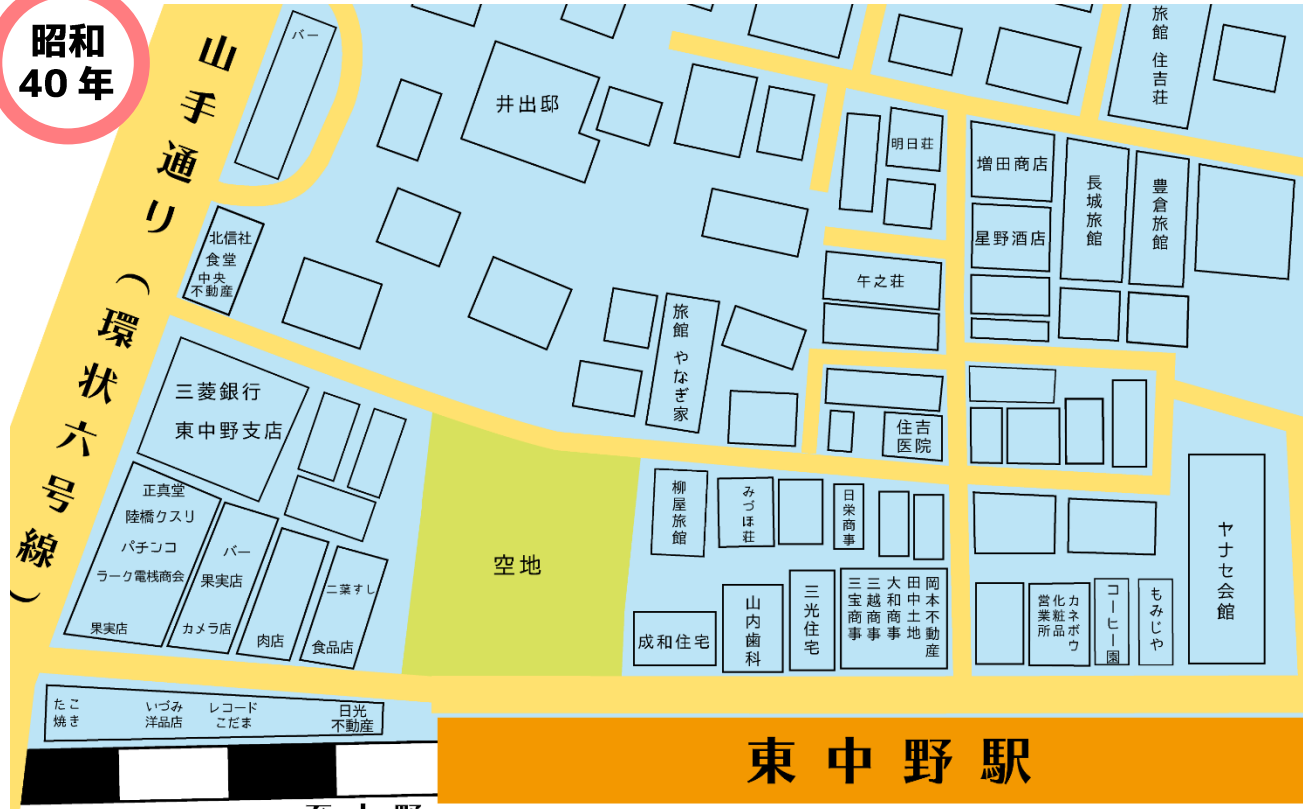
既に建物は建っているが、「モナミ」ではなく「木部」邸となっている。
 参考資料：『中野区全域図』昭和8年 都市製図社, [1933年] (M8/A)

昭和
36年



昭和30年代になると「モナミ」と「モナミ喫茶部」が地図上で確認できる。
 参考文献：『東京都全住宅案内図帳 中野区』住宅協会/編, 住宅協会, 1961年 (M8/A/61)

昭和
40年



「モナミ」の表示や建物が地図上から無くなった。近くに、現在も残っている銀行ができている。
 参考資料：『東京都大阪府名古屋全住宅案内地図帳 中野区 1965年度版』住宅協会地図部, 1965年
 (国立国会図書館所蔵)

昭和
45年



ちょうど「モナミ」の門があった場所付近から新しい道と広場が作られた。
 参考資料：『全住宅案内地図帳 中野区版』公共施設地図/編, 渋谷逸雄, 1974年 (M8/A/74)

年表

年	日付	イベント	できごと	出典
1947年 (S22)	3月10日	将棋名人戦第2局	木村義雄名人と塚田正夫八段の試合。	『将棋名人戦 昭和・平成 時代を映す名勝負 -』
	4月9日	同第5局		『将棋名人戦 昭和・平成 時代を映す名勝負 -』
	4月26日	日本ペンクラブ 幹事会	この時に再建日本ペンクラブ発足する。 参加者は白鳥正宗、中島健蔵、芹沢光治良、豊島与志雄、小牧近江、小松清、大岩誠、寺崎浩、河盛好蔵、青野季吉、立野信之、末常卓郎、新居格、松尾邦之助、宮川謙一、書記局の夏目三郎、佐久間克己。	『日本ペンクラブ五十年史』
	5月13日	将棋名人戦第6局 指し直し		『将棋名人戦 昭和・平成 時代を映す名勝負 -』
	5月27日	同第7局	将棋名人戦指直し。 「将棋第六期名人決定戦は七番勝負のうち木村名人二勝、塚田八段三勝、一持将棋で塚田八段史の勝越しのうちに第七局は27日午前十時から東京都東中野のモナミで対局したがついに七十二手で千日手となった。指直しは来月六、七の両日行う」	朝日新聞S22年5月29日 読売新聞S22年5月29日
	6月6日	同第7局指し直し	坂口安吾が「散る日本」で、詳しく観戦記を書いている。 当時の誌面では割烹旅館と書かれている。	『将棋名人戦 昭和・平成 時代を映す名勝負 -』 『坂口安吾全集』 5巻「散る日本」
	7月?	井伏鱒二と上林暁が将棋を指す	『ホープ』という雑誌の企画で、井伏鱒二と上林暁で一局将棋をさした。対局の日付は「名人戦の決戦の直後」や、「木村名人と塚田八段が新モナミで名人戦をした翌月」とも。漫画家の清水崑が対局場をスケッチした。 モナミの支配人に、それぞれ上林が「髪の毛の薄い方の先生」井伏が「太ってらっしゃる先生」という呼び方をされる。	『井伏鱒二全集』 第11巻 『井伏鱒二全集』 第25巻 『ホープ』 第2巻第10号 (10月号)

年	日付	イベント	できごと	出典
	10月13日	米内光政、八角、 荒城等と数人寄って 「近來の珍味」	「近來の珍味」と表記されているが、モナミ のメニューの詳細は分からない。	『静かなる楯 米内光 政』
1948年 (S23)	2月16日	夜の会の第1回公開 研究会	午後2時から開始。一般の聴講者を交えた 研究会。報告者は中野秀人で、テーマは「 神について」。	『安部公房・荒野の人』
	3月4日	金森国立国会図書館 長の在京図書館 招待会	「三月四日木曜日午後五時、会場は東中野 のモナミ、主人側は先づ金森新館長（後 略）」という記述がある。	『図書館雑誌』 42巻 1号 (1948年1～3月)
	7月10日	雑誌「近代文学」全 同人会議	参加者は本多秋五、埴谷雄高、荒正人、 佐々木基一、野間宏、平田次三郎、新同人 としては梅崎春生、武田泰淳、関根弘、齋 藤正直、青山光二、原民喜、原通久、中田 耕治、安部公房。散会後は新宿に行った。	『安部公房・荒野の人』
	12月4日	『死霊』出版 記念会	山室静、伊藤整、原民喜、片山修三、岡本 太郎、関根弘、椎名麟三、花田清輝、本多 秋五、荒正人、佐々木基一、久保田正文、 野間宏らが出席。	『埴谷雄高全集』別巻
1949年 (S24)	この年	夜の会会員と、日本 共産党の党员との懇 談会	夜の会の会員は、花田清輝、野間宏、椎名 麟三、佐々木基一、埴谷雄高、岡本太郎、 共産党側は野坂参三。	『花田清輝全集』別巻2
1950年 (S25)	5月	イサム・ノグチ 歓迎会	日本アヴァンギャルド美術家クラブが主催 した「イサム・ノグチ歓迎会」東中野のモ ナミに約40名が集った。日本の抽象芸術を 代表するアーティストが揃っており、岡本 太郎も参加した。	『イサム・ノグチ 宿命 の越境者 下』
	5月	タカクラ・テルと清 水幾太郎の対談	雑誌『展望』の企画で、モナミの日本間で 行われた。	『清水幾太郎著作集』 15 巻 『活字にならなかった 話』 『蛙のうた』
1951年 (S26)	4月7日	第二回戦後文学賞授 賞式	戦後文学賞は、月曜書房の主宰で昭和25年 創設された賞で、戦後文学作品のうち、新 しい傾向のある作品に賞が送られた。第2 回は安部公房が「赤い繭」で受賞。これ以降 中止となった。	『安部公房評伝年譜』

年	日付	イベント	できごと	出典
	5月27日	山本安英文部大臣賞 受賞祝賀会	音楽家や文士など12、3人もの人が集まった。	『秋田雨雀日記』4・5巻
	7月5日	中島健蔵と野上 弥生子対談	雑誌『女性改造』の企画で、女流作家について対談する。	『野上弥生子全集』第二期第11巻 日記1951～1953
	10月20日	江戸川乱歩講演 （「さんど会」）		『江戸川乱歩全集』第29巻 探偵小説四十年 下
1952年（S27）	1月6日	『貝になったことも』出版記念会	午後1時開始。「松谷みよ子君の友人と児童文学者協会会員とを合して約40人ほどの人が集まった。岡本良雄君の司会で会員友人が約10名ほどあいさつした。アコーディオンと音楽、人形芝居などがあった」。	『秋田雨雀日記』4・5巻 『児童文学の戦後史』 年表
	2月25日	「近代文学」と 中国文学研究会と 「荒地」の共同主催 で、堀田善衛の『広 場の孤独』芥川賞受 賞記念会	本多秋五が司会を務めた。	『本多秋五全集』別巻 年譜
	4月16日	「近代文学」同人主 催による野間宏の長 篇『真空地帯』の出 版記念会	本多秋五が司会を務めた。	『本多秋五全集』別巻 年譜
1953年（S28）	1月31日	秋田雨雀生誕70年を 祝う会	午後2時から生誕70年を祝う会が開始。秋田雨雀の「モスクワの流氷」を北林谷栄が朗読、エロシエンコの「乞食と皇帝」の幻燈（錦影絵）、「津軽唄」「鳩間節」「ヴォルガ下り」などの余興も行われた。	『秋田雨雀日記』4・5巻
	2月17日	『宮本百合子全集』 完結記念の会		『中野重治全集』別巻年譜 『野上弥生子全集』第二期第11巻 日記1951～1953
	4月4日	高村光太郎が夜食を 食べる	女流歌人の中原綾子におごってもらう。	『高村光太郎全集』 第13巻

年	日付	イベント	できごと	出典
	5月11日	雨雀会実行委員会の代議士招待兼懇談会		『秋田雨雀日記』4・5巻
	5月25日	4時半から浜田広介文部大臣賞祝賀会 6時半頃から雨雀会実行委員会		『秋田雨雀日記』4・5巻
	7月25日	国際アート・クラブの日本本部 発会式		『戦後空白期の美術』 瀬木慎一
	8月8日	在日朝鮮人文学会 その他主催の集まり	7月27日の朝鮮休戦協定調印を祝って開かれた。	『中野重治全集』 別巻年譜
	11月15日	佐多稲子の息子である窪川健造（映画監督）の結婚式	中野重治・原泉・壺井栄・吉村公三郎などが出席。	『あとや先き』佐多稲子
1954年（S29）	1月	庄野潤三の『愛撫』と小島信夫『小銃』の合同出版記念会。 佐藤春夫、井伏鱒二、中山義秀スピーチ、発起人安岡章太郎	「たしか昭和29年の春先であった。吉行淳之介の意見で発起人に先輩の名を借りず、「構想の会」の同人名だけを並べた」。	『僕の昭和史II』安岡章太郎 『野菜讃歌』庄野潤三
	3月9日	金達寿『玄海灘』出版記念会	午後5時開始。	『中野重治全集』 別巻年譜
	4月4日	1月に理論社から『嵐の中の本の木』を刊行した真鍋呉夫と安部公房の『飢餓同盟』の合同出版記念会	勅使河原宏、白井浩司、島尾敏雄、小島信夫、奥野健男、庄野潤三、草野心平、山下肇、岡本太郎、石川淳、村松剛、針生一郎、佐々木基一、十返肇など40余名が芳名帳に記載。	『安部公房評伝年譜』
	5月17日	国際アート・クラブの日本本部第一回総会		『戦後空白期の美術』 瀬木慎一

年	日付	イベント	できごと	出典
	初夏頃	「現在の会」定例会	定例会のあと、針生一郎が結婚前の奥さんを連れてモナミの喫茶部に行くと、島尾敏雄と女性(『死の棘』で主人公の妻に「あいつ」と言われているモデルの女性)が会話をしているのを見かける。	『言葉と言葉ならざるもの』針生一郎
	9月16日	大杉栄の会	午後6時開始。	『秋田雨雀日記』4・5巻
	11月	吉行淳之介芥川賞受賞記念パーティ		『吉行淳之介全集』第14巻
	12月14日	畔柳二美『姉妹』の出版記念会	午後5時開始。	『中野重治全集』別巻年譜
1955年 (S30)	1月10日	花田清輝『アヴァンギャルド芸術』岡本太郎『今日の芸術』の合同出版記念会	午後5時半開始。	『中野重治全集』別巻年譜 『安部公房・荒野の人』
	3月	岸田国土の一周忌		『季刊芸術』8(1)(通号28号)
	4月14日	小川未明作品集出版記念会	中野重治、与田準一、巽聖歌らが出席。	『児童文学の戦後史』年表
	5月28日	堀辰雄没後二年の会	午後6時開始。	『中野重治全集』別巻年譜
	6月1日	白水社主催の明治、大正、昭和の戯曲を語る会	山田肇、関口次郎、戸板康二、大木直太郎、田中千禾夫、秋田雨雀が参加。	『秋田雨雀日記』4・5巻
	8月24日	ソ連代表の歓送会		『秋田雨雀日記』4・5巻
	11月13日	松谷みよ子と瀬川拓男の結婚式	坪田譲治・ナミコ夫妻が仲人を務めた。人形劇や朝鮮舞踊など賑やかであった。	『松谷みよ子の本』別巻
1956年 (S31)	2月20日	四氏を送って注文をつける会	中国作家協会から、日本文学についての講演を目的として、中国訪問の話が持ち上がった。臼井吉見、本多秋五、宮本顕治、中野重治が招かれたので、その4人を見送る会だったが、旅券が発給拒否されて行けなかった。	『中野重治全集別巻』年譜

年	日付	イベント	できごと	出典
	不明	百田宗治の追悼会	福田清人、野田宇太郎、室生犀星、吉田瑞穂など。	『室生犀星文学年譜』
1957年 (S32)	4月22日	仲代達矢と宮崎恭子の結婚披露宴 二次会	会費制の二次会で、会費は500円だった。発起人には千田是也、東野英治郎、小沢栄太郎、東山千栄子など。	日本経済新聞2005年11月7日 私の履歴書⑦仲代達矢
	5月19日	「記録芸術の会」の発起人会(第1回総会)	この会の中心議題は「多彩な芸術ジャンルの交流と、芸術の総合化ということで、活字文化から視聴覚文化へという標語をかけた」ということだ。	『安部公房評伝年譜』 『安部公房・荒野の人』 『戦後前衛映画と文学』 『昭和文学交友記』
	10月5日	霜多正次『沖縄島』出版記念会	中野重治がスピーチを行った。	『中野重治全集別巻』 年譜
1958年 (S33)	10月24日	新劇人合同還暦を祝う会(六人衆還暦の祝い)	土方与志、北村喜八、薄田研二、佐々木孝丸、高橋邦太郎、久板栄二郎の6人。秋田雨雀は参加したメンバーが「美しいバッチで元気な顔を並べたのはうれしかった」と記述している。	『千田是也演劇論集』 第3巻 『秋田雨雀日記』4・5巻 『俳優座史』
1959年 (S34)	1月17日	友の会年始会	鳩山一郎日記には「各地から百人ばかり集合、よく来たものなり。歌合戦などして四時散会」との記載あり。	『鳩山一郎・薫日記』下
	2月11日	西田信春を偲ぶ会	中野重治が主催。通知の封書が『中野重治との日々』石堂清倫著12ページに収録されている。	『中野重治全集別巻』 年譜
	12月27日	チェコスロバキヤへ行く村井志摩子の送別会	30人ほどの舞芸座関係の人々と舞芸の講師、友人たちが集った。	『秋田雨雀日記』4・5巻
1960年 (S35)	7月8日	安保闘争総括の会	この時の清水幾太郎の報告は、『中央公論』9月号に「安保戦争の「不幸な主役」—安保闘争はなぜ挫折したか・私小説風の総括」という題名で掲載された。	『清水幾太郎著作集』14巻
1962年 (S37)	1月10日	八田元夫を激励する会	二次会(新宿の「花風」)まで行ったのが高見順、壺井繁治、佐々木孝丸、村松正俊、和田勝一、岩崎昶、北条元一、内田義彦等。	『高見順日記 続』第1巻
1963年 (S38)	12月9日	森乾がモナミで披露宴	金子光晴の息子でフランス文学者の森乾が、秋田の井上登子と6月に結婚。披露宴はこの時に行われた。	『金子光晴全集』第15巻

年	日付	イベント	できごと	出典
1964年 (S39)	2月29日	朴雄傑『鴨緑江』出版記念会	6時半開始。佐多稲子・井上光晴・国分一太郎・中野重治らが参加。	『中野重治全集別巻』年譜
	6月あたりか	雑誌『あいなめ』の同人の顔合わせ	2月の終わり頃、モナミに部屋を予約しに行き、6月頃顔合わせ。	『風狂の人 金子光晴』 『金子光晴全集』第15巻

【その他、日付がわからない会】

※「アダム・スミスの会」神田の学士会館やモナミを会場として使っていた(大河内一男・矢内原忠雄などが参加)

※近代文学同人会の同人会議を行う(行っていた頃、という記述あり)

『本多秋五全集』第8巻「編集後記(近代文学12月号)」

展示風景



▲ 展示スペース



▲ ポスター



▲ 平置きガラスケース

▶ 正面入口ガラスケース



第16回中野区ゆかりの著作者紹介展示
幻のモノミブクリスト

★ 展示した資料
請求記号のないものは未所蔵資料

秋田雨雀

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	秋田雨雀日記 第4巻	秋田 雨雀／著	未来社	1966	915.6 アキ
★	秋田雨雀日記 第5巻	秋田 雨雀／著	未来社	1967	915.6 アキ
★	名著複製日本児童文学館 第1集[13] 太陽と花園	秋田 雨雀／著	ほるぶ出版	1972	918.6 メ

安部公房

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	R62号の発明・鉛の卵 改版(新潮文庫)	安部 公房／著	新潮社	2004	913.6 アベ
★	安部公房全集 001 1942.12-1948.05	安部 公房／著	新潮社	1997	918.68 アベ
★	安部公房全集 002 1948.06-1951.05	安部 公房／著	新潮社	1997	918.68 アベ
★	安部公房全集 007 1957.01-1957.11	安部 公房／著	新潮社	1998	918.68 アベ
★	榎本武揚 改版(中公文庫)	安部 公房／著	中央公論社	1990	913.6 アベ
★	飢饉同盟 改版(新潮文庫)	安部 公房／著	新潮社	2011	913.6 アベ
★	砂の女 改版(新潮文庫)	安部 公房／著	新潮社	2003	913.6 アベ
★	箱男 改版(新潮文庫)	安部 公房／著	新潮社	2005	913.6 アベ
	安部公房評伝年譜	谷 章介／編著	新泉社	2002	R910.26 ア
★	安部公房・荒野の人 (seishido brochure)	宮西 忠正／著	青柿堂	2009	910.268 アベ
★	安部公房伝	安部 ねり／著	新潮社	2011	910.268 アベ
★	戦後前衛映画と文学 安部公房×勅使河原宏	友田 義行／著	人文書院	2012	778.21 ト

井伏鱒二

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	井伏鱒二全詩集 (岩波文庫)	井伏 鱒二／著	岩波書店	2004	911.56 イ
★	井伏鱒二全集 第11巻	井伏 鱒二／著	筑摩書房	1998	918.68 イブ
★	井伏鱒二全集 第25巻	井伏 鱒二／著	筑摩書房	1998	918.68 イブ
★	狹窪風土記	井伏 鱒二／著	新潮社	1982	914.6 イブ
★	還暦の鯉 (講談社文芸文庫 現代日本のエッセイ)	井伏 鱒二／著	講談社	1994	914.6 イブ
★	黒い雨	井伏 鱒二／著	新潮社	1995	913.6 イブ
★	神屋宗湛の残した日記 (講談社文芸文庫)	井伏 鱒二／著	講談社	2010	913.6 イブ
★	早稲田の森 随筆	井伏 鱒二／著	新潮社	1976	914.6 イブ
★	定本 夜ふけと梅の花	井伏 鱒二／著	永田書房	1991	913.6 イブ
★	漂民字三郎 (講談社文芸文庫)	井伏 鱒二／著	講談社	1990	913.6 イブ

江戸川乱歩

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	江戸川乱歩全集 第4巻 孤島の鬼(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2003	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第5巻 押絵と旅する男(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2005	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第23巻 怪人と少年探偵(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2005	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第25巻 鬼の言葉(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2005	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第26巻 幻影城(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2003	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第27巻 幻影城 続(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2004	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第29巻 探偵小説四十年 下(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2006	918.68 エド
★	江戸川乱歩全集 第30巻 わが夢と真実(光文社文庫)	江戸川 乱歩／著	光文社	2005	918.68 エド
★	探偵小説四十年	江戸川 乱歩／著	桃源社	1961	910.26 エ
★	乱歩随筆	江戸川 乱歩／著	青蛙房	1960	914.6 エド
★	乱歩彷徨 なぜ読み継がれるのか	紀田 順一郎／著	春風社	2011	910.268 エド

岡本太郎

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	忘れられた日本 沖縄文化論	岡本 太郎／著	中央公論社	1969	302.1 オ
★	美の世界旅行	岡本 太郎／著	新潮社	1982	915.6 オカ
★	美の呪力 (新潮文庫)	岡本 太郎／著	新潮社	2004	704 オカ
★	ピカソ<ピカソ講義> (ちくま学芸文庫)	岡本 太郎／著	筑摩書房	2009	723.3 エ
★	岡本太郎と日本の祭り	岡本 太郎／著	二玄社	2011	386.1 オ
★	原色の呪文 現代の芸術精神 (講談社文芸文庫)	岡本 太郎／著	講談社	2016	704 オ
	岡本太郎に乾杯	岡本 敏子／著	新潮社	1997	723.1 オ
★	太郎神話 岡本太郎という宇宙をめぐって	岡本 敏子／編	二玄社	1999	723.1 オ
★	世田谷時代 1946-1954の岡本太郎	-	世田谷美術館	2007	Q16 B12
★	世田谷時代 1946-1954の岡本太郎 2	-	世田谷美術館	2007	Q16 B12
★	岡本太郎の世界	-	小学館	1999	723.1 オ
★	岡本太郎新世紀 (別冊太陽 日本のこころ)	-	平凡社	2011	723.1 オ
★	明日の神話 岡本太郎の魂	『明日の神話』再生プロジェクト／編著	青春出版社	2006	723.1 オ

木村義雄

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	将棋一代	木村 義雄／著	世界社	1952	796 キ
★	勝負の世界 将棋随想	木村 義雄／著	恒文社	1995	796 キ
	将棋名人戦 昭和・平成時代を映す名勝負	-	日本将棋連盟	2014	796 シ
★	勝負師 将棋・囲碁作品集	坂口 安吾／著	中央公論新社	2018	914.6 サカ

第16回中野区ゆかりの著作者紹介展示
幻のモノミブクリスト

★ 展示した資料
請求記号のないものは未所蔵資料

五味康祐

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	一刀斎は背番号6	五味 康祐／著	ファラオ企画	1992	913.6 ゴミ
★	五味康祐代表作集 第1巻 喪神 柳生連也斎	五味 康祐／著	新潮社	1981	913.6 ゴミ
★	五味康祐代表作集 第2巻 剣法奥儀 柳生宗矩と十兵衛	五味 康祐／著	新潮社	1981	913.6 ゴミ
★	五味康祐代表作集 第10巻 一刀斎は背番号6 指さしていふ	五味 康祐／著	新潮社	1981	913.6 ゴミ
★	小説長島茂雄 五味一刀斎の長島讃歌 (光文社文庫)	五味 康祐／著	光文社	1993	913.6 ゴミ
★	人間の死にざま	五味 康祐／著	新潮社	1980	914.6 ゴミ
★	西方の音	五味 康祐／著	新潮社	1978	760.4 ゴ
★	天の声 西方の音	五味 康祐／著	新潮社	1976	760.4 ゴ
★	柳生武芸帳	五味 康祐／著	新潮社	1993	913.6 ゴミ
★	陽気な殿様 (文春文庫)	五味 康祐／著	文芸春秋	1988	913.6 ゴミ

中野重治

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	むらぎも (講談社文芸文庫)	中野 重治／著	講談社	1989	913.6 ナカ
★	甲乙丙丁 上 (講談社文芸文庫)	中野 重治／著	講談社	1991	913.6 ナカ
★	甲乙丙丁 下 (講談社文芸文庫)	中野 重治／著	講談社	1991	913.6 ナカ
★	中野重治の国帖	中野 重治／著	新潮社	1995	723.1 ナ
★	中野重治戦後短篇小説集	中野 重治／著	梓書店	1994	913.6 ナカ
★	中野重治全集 別巻 定本版	中野 重治／著	筑摩書房	1998	918.68 ナカ
★	梨の花 (岩波文庫)	中野 重治／著	岩波書店	1985	913.6 ナカ
★	鶴外その側面 (ちくま学芸文庫)	中野 重治／著	筑摩書房	1994	910.268 モリ
★	夏の菜 中野重治をおくる	佐多 稲子／著	新潮社	1983	913.6 サタ
★	中野重治との日々	石堂 清倫／著	勁草書房	1989	915.6 イン
★	中野重治と社会主義	石堂 清倫／著	勁草書房	1991	

丹羽文雄

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	運命	丹羽 文雄／著	講談社	1970	913.6 ニフ
★	創作の秘密	丹羽 文雄／著	講談社	1976	914.6 ニフ
★	鮎 自選短篇集 1 (集英社文庫)	丹羽 文雄／著	集英社	1978	913.6 ニフ
★	蕩児帰郷	丹羽 文雄／著	中央公論社	1979	913.6 ニフ
★	わが母、わが友、わが人生	丹羽 文雄／著	角川書店	1985	913.6 ニフ
★	ひと我を非情の作家と呼ぶ (光文社文庫)	丹羽 文雄／著	光文社	1988	910.268 ニフ
★	をりふしの風景	丹羽 文雄／著	学芸書林	1988	914.6 ニフ
★	海戦 伏字復元版 (中公文庫)	丹羽 文雄／著	中央公論新社	2000	913.6 ニフ
★	小説作法 (講談社文芸文庫)	丹羽 文雄／著	講談社	2017	901.3 ニ
★	評伝丹羽文雄	小泉 謙／著	講談社	1977	910.268 ニフ

花田清輝

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	花田清輝全集 別巻2	花田 清輝／著	講談社	1980	918.68 ハナ
★	俳優修業 (講談社文芸文庫)	花田 清輝／著	講談社	1991	913.6 ハナ
★	復興期の精神 (講談社学術文庫)	花田 清輝／著	講談社	1991	914.6 ハナ
★	花田清輝評論集 (岩波文庫)	花田 清輝／著	岩波書店	1993	914.6 ハナ
★	アヴァンギャルド芸術 (講談社文芸文庫)	花田 清輝／著	講談社	1994	914.6 ハナ
★	ものみな歌でおわる・爆裂弾記 (講談社文芸文庫 現代日本の戯曲)	花田 清輝／著	講談社	1996	912.6 ハナ
★	花田清輝集 (戦後文学エッセイ選)	花田 清輝／著	影書房	2005	914.6 ハナ
★	ものみな映画で終わる 花田清輝映画論集	花田 清輝／著	清流出版	2007	778.0 ハ
★	花田清輝の世界	-	新評社	1981	910.268 ハナ
★	花田清輝 二十世紀の孤独者 (シリーズ民間日本学者)	関根 弘／著	リプロボート	1987	910.268 ハナ

堀谷雄高

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	闇の中の黒い馬	堀谷 雄高／著	河出書房新社	1981	913.6 ハニ
★	影絵の時代	堀谷 雄高／著	河出書房新社	1997	910.268 ハニ
★	影絵の世界 (筑摩叢書)	堀谷 雄高／著	筑摩書房	1992	910.268 ハニ
★	幻視の詩学 わたしのなかの詩と詩人 (詩の森文庫)	堀谷 雄高／著	思潮社	2005	902.1 ハ
★	堀谷雄高集 (戦後文学エッセイ選)	堀谷 雄高／著	影書房	2005	914.6 ハニ
★	堀谷雄高全集 16 二つの同時代史	堀谷 雄高／著	講談社	2000	918.68 ハニ
★	堀谷雄高全集 別巻[1] 資料集	堀谷 雄高／著	講談社	2001	918.68 ハニ
★	堀谷雄高全集 別巻[2] 死霊	堀谷 雄高／著	講談社	2001	918.68 ハニ
★	戦後の先行者たち 同時代追悼文集	堀谷 雄高／著	影書房	1984	910.26 ハ
★	堀谷雄高との対話	白川 正芳／著	慶應義塾大学出版会	2006	910.268 ハニ

針生一郎

	書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★	バルザックとフランス・リアリズム (時代の窓)	G・ルカーチ／著、針生 一郎／訳	岩波書店	1955	950.2 バ
★	戦後美術盛衰史 (東書選書)	針生 一郎／著	東京書籍	1979	702.1 ハ
★	言葉と言葉ならざるもの 針生一郎評論集	針生 一郎／著	三一書房	1982	914.6 ハリ
★	わが愛憎の画家たち (平凡社選書)	針生 一郎／著	平凡社	1983	721.0 ハ

第16回中野区ゆかりの著作者紹介展示
幻のモノミブックス

★ 展示した資料
請求記号のないものは未所蔵資料

★ シュルレアリスム (ヴァルター・ベンヤミン著作集 8)	ヴァルター・ベンヤミン/著、 針生 一郎/編集解説	晶文社	1986	944.7	ベ
★ 修羅の画家 評伝阿部合成 (同時代ライブラリー)	針生 一郎/著	岩波書店	1990	723.1	ア

松谷みよ子

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★ モモちゃんとアカネちゃん (講談社文庫 モモちゃんとアカネちゃん)	松谷 みよ子/著	講談社	1988	913.6 マツ
★ 松谷みよ子の本 別巻 松谷みよ子研究資料	松谷 みよ子/著	講談社	1997	918.68 マツ
★ 若き日の詩 (ことばのおくりもの)	松谷 みよ子/著	童心社	2003	911.56 マ
★ 現代の民話 あなたも語り手、わたしも語り手 (中公新書ワイド版 子どもという宝石)	松谷 みよ子/著	中央公論新社	2004	388.1 マ
★ 異界からのサイン	松谷 みよ子/著	筑摩書房	2004	388.1 マ
★ 自伝じょうちゃん	松谷 みよ子/著	朝日新聞社	2007	910.268 マツ

森乾

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★ 金子光晴全集 第15巻	金子 光晴/著	中央公論社	1977	911.56 カ
★ 沈黙のたたかい フランス・レジスタンスの記録	ヴェルコール/著、森 乾/訳	新評論	1992	956 ベ
★ 詩集「三人」	金子 光晴/著、森 三干代/著、森 乾/著	講談社	2008	911.56 カ
★ 父・金子光晴伝 夜の果てへの旅	森 乾/著	書肆山田	2002	

八木義徳

★ 風祭	八木 義徳/著	河出書房新社	1977	913.6 ヤギ
★ 北風の言葉	八木 義徳/著	北洋社	1980	914.6 ヤギ
★ 一枚の絵	八木 義徳/著	河出書房新社	1981	913.6 ヤギ
★ 遠い地平	八木 義徳/著	新潮社	1983	913.6 ヤギ
★ 漂雲	八木 義徳/著	河出書房新社	1984	913.6 ヤギ
★ 夕虹	八木 義徳/著	福武書店	1989	913.6 ヤギ
★ 八木義徳全集 8	八木 義徳/著	福武書店	1990	918.68 ヤギ
★ 何年ぶりの朝 八木義徳自選随筆集	八木 義徳/著	北海道新聞社	1994	914.6 ヤギ
★ われは蝸牛に似て	八木 義徳/著	作品社	2000	913.6 ヤギ
★ 私のソニー・風祭 八木義徳名作選 (講談社文芸文庫)	八木 義徳/著	講談社	2000	913.6 ヤギ

遠藤新と周辺人物

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★ 人事興信録 6版	人事興信所/編	人事興信所	1921	
★ 現代財界家系譜	-	現代名士家系譜刊行会	1968	
★ 私の履歴書 第7集	日本経済新聞社/編、星島 二郎ほか/著	日本経済新聞社	1972	281 フ
★ 遠藤新生誕一〇〇年記念 人間・建築・思想	INAXギャラリー企画委員会/企画	INAX東京ショールーム	1989	Q21 A
★ 建築家遠藤新作品集	遠藤 新/著	中央公論美術出版	1991	523.1 エ
★ 一粒の麦 いま蘇る星島二郎の生涯	「政治と人」刊行会/編	広済堂出版	1996	
★ 帝国ホテルライト館の幻影 孤高の建築家遠藤新の生涯	遠藤 陶/著	広済堂出版	1997	
★ 中野を語る建物たち 中野区大正期・昭和前期建造物調査報告書	伝統技法研究会/制作	中野区教育委員会	2011	Q25 A

フランク・ロイド・ライト

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★ ライトの住宅 自然・人間・建築	フランク・ロイド・ライト/著、遠藤 楽/訳	彰国社	1975	527 ラ
★ ライトの生涯	オルギヴァンナ・L・ライト/著、遠藤 楽/訳	彰国社	1983	289.3 ラ
★ フランク・ロイド・ライト 幻の建築計画	ブルース・フルックス・ファイファー/著、 遠藤 楽/訳	グランドプレス	1987	523.5 フ
★ ライト式建築	井上 祐一/著、小野 吉彦/著	柏書房	2017	523.5 イ

ブルーノ・タウト

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★ ブルーノ・タウトと現代「アルプス建築」から「桂離宮」へ	土肥 美夫/著	岩波書店	1981	523.3 プ
★ ブルーノ・タウト 1880-1938 Nature and fantasy	マンフレッド・シュバイデル/著	トレヴィル	1994	523.3 プ
★ 桂離宮 ブルーノ・タウトは証言する	宮元 健次/著	鹿島出版会	1995	521.8 ミ

モノミの記述がある資料

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号
★ 矢内原忠雄全集 月報	大内 兵衛/著	岩波書店	1982	081.6 ヤ
★ 蛙のうた ある編集者の回想 (筑摩叢書)	臼井 吉見/著	筑摩書房	1972	910.26 ウ
★ 高見順日記 続 第1巻 わが文壇生活	高見 順/著	勁草書房	1975	915.6 タカ
★ 共同研究集団 サークルの戦後思想史	思想の科学研究会	平凡社	1976	379.6 キ
★ 児童文学の戦後史 評論・年表『日本児童文学』総目次	日本児童文学者協会/著	東京書籍	1978	909 ジ
★ 活字にならなかった話 遠記五十年	福岡 隆/著	筑摩書房	1980	809.8 フ
★ 室生犀星文学年譜	室生 朝子/著	明治書院	1982	910.268 ムロ
★ 風狂の人 金子光晴	桜井 滋人/著	大陸書房	1982	911.52 カ
★ 昭和文学交友記	佐々木 基一/著	新潮社	1983	910.26 サ
★ 僕の昭和史 2	安岡 章太郎/著	講談社	1984	210.7 ヤ
★ 千田是也演劇論集 第3巻 1955~1959年、新劇ブームと戦後世代の台頭	千田 是也/著	未来社	1985	770.8 セ
★ 本、それはいのちあるもの 出版流通の現場から	稲葉 通雄/著	影書房	1985	024.1 イ
★ 菅野満子の手紙	小島 信夫/著	集英社	1986	915.6 コジ

第16回中野区ゆかりの著作者紹介展示
幻のモノミブックスリスト

★ 展示した資料
請求記号のないものは未所蔵資料

★ 沢野ひとしの少年少女絵物語	沢野 ひとし/著	本の雑誌社	1986	914.6	サワ
日本ペンクラブ五十年史	日本ペンクラブ/編	日本ペンクラブ	1987		
★ 野上弥生子全集 第2期 第11巻 日記 1951～1953	野上 弥生子/著	岩波書店	1988	918.68	ノガ
★ 私の東京物語	中山 あい子/著	海竜社	1988	915.6	ナカ
★ 静かなる種・米内光政 下	高田 万亀子/著	原書房	1990	289.1	ヨ
★ 清水幾太郎著作集 14 わが人生の断片	清水 幾太郎/著	講談社	1993	081.6	シ
★ 清水幾太郎著作集 15 この歳月	清水 幾太郎/著	講談社	1993	081.6	シ
★ あとや先き	佐多 稲子/著	中央公論社	1993	914.6	サタ
★ 想い出の作家たち 1	文芸春秋	文芸春秋	1993	910.2	オ
★ 寂聴・猛の強く生きる心	梅原 猛/著	講談社	1994	914.6	ウメ
★ ふるさと文学館 第13巻 千葉	祖田 浩一/責任編集	ぎょうせい	1994	918.6	フ
★ 本多秋五全集 第8巻	本多 秋五/著	菁柿堂	1995	904	ホ
★ 本多秋五全集 別巻1	本多 秋五/著	菁柿堂	1999	904	ホ
★ 高村光太郎全集 第13巻 増補版	高村 光太郎/著	筑摩書房	1995	918.68	タカ
★ 吉行淳之介全集 第14巻	吉行 淳之介/著	新潮社	1998	918.68	ヨシ
★ 壺井栄全集 7	壺井 栄/著	文泉堂出版	1998	918.68	ツボ
★ 野菜讃歌	庄野 潤三/著	講談社	1998	914.6	シヨ
★ 南天堂 松岡虎王磨の大正・昭和	寺島 珠雄/著	皓星社	1999	024.0	テ
★ 瑠璃色の石	津村 節子/著	新潮社	1999	913.6	ツム
★ イサム・ノグチ 宿命の越境者 下	ドウス 昌代/著	講談社	2000	712.5	ノ
★ 場所	瀬戸内 寂聴/著	新潮社	2001	913.6	セト
★ 鳩山一郎・薫日記 下巻 鳩山薫篇	鳩山 薫/著	中央公論新社	2005	289.1	ハ
★ 林京子全集 8 ヴァージニアの蒼い空	林 京子/著	日本図書センター	2005	918.68	ハヤ
★ 通り過ぎた人々	小沢 信男/著	みすず書房	2007	910.26	オ
★ ふたり旅 生きてきた証しとして	津村 節子/著	岩波書店	2008	910.268	ツム
★ 桜道路	津村 節子/著	河出書房新社	2008	914.6	ツム
★ 私の文学漂流 (ちくま文庫)	吉村 昭/著	筑摩書房	2009	910.268	ヨシ
★ 新・日本文壇史 第5巻 昭和モダンと転向	川西 政明/著	岩波書店	2011	910.26	カ

文学者

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号	
★ 昭和文壇側面史 (講談社文芸文庫 回想の文学)	浅見 淵/著	講談社	1996	910.26	ア
★ 十五日会と「文学者」文壇資料	中村 八朗/著	講談社	1981	910.26	ナ
★ 文学者 第57号(昭和30年4月号)	十五日会/編	十五日会	1955	V87	A

夜の会

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号	
★ 新しい芸術の探求	「夜の会」/編	月曜書房	1949	704	ヤ
★ 針の穴とラクダの夢 半自伝	関根 弘/著	草思社	1978	911.52	セ
★ 戦後空白期の美術	瀬木 慎一/著	思潮社	1996	702.1	セ
★ 野間宏全集 第9巻	野間 宏/著	筑摩書房	1974	918.68	ノマ

歴史としてのモノミ

書名	著者名	出版者名	出版年	請求記号	
★ ドキュメント帝銀事件 新版(ルポルターージュ叢書)	和多田 進/著	晩声社	1994	326.2	ワ
★ 私のなかの東京 わが文学散策 (岩波現代文庫 文芸)	野口 富士男/著	岩波書店	2007	910.26	ノ
★ 喫茶店の時代 あのときこんな店があった	林 哲夫/著	編集工房ノア	2002		
★ 中央線がなかったら 見えてくる東京の古層	陣内 秀信/編著	NTT出版	2012	M25	D
★ 写真で見る東京の激変	大竹 静市郎/写真・解説	世界文化社	2005	N1	D
★ 味の東京	関 瑞男/編	新紀元社	1956	P11	D
★ その人その頃	中島 健三・巖谷 大四/連著	丸ノ内出版	1973	910.26	ナ
★ 骨董遍歴	久志 卓真/著	昭森社	1963		

雑誌・新聞掲載記事・作品

題名	著者名	出典	出版年	請求記号
住宅小品十五種	遠藤 新/著	『婦人之友』1924年5月号	1924	
建築啓蒙 一	遠藤 新/著	『朝日新聞』1925年1月20日	1925	
井伏鱒二 上林暁 文人将棋	清水 巖/著	『ホープ』2(10)	1947	
文人と将棋	倉島 竹二郎/著	『ホープ』2(10)	1947	
金森国立国会図書館長の在京図書館招待会	-	『図書館雑誌』42巻 1号	1948	
近代中野区社会文化史 中野区の今昔(7)	中谷 千章/著	『中央新聞』昭和45年5月15日	1970	V86 A
岸田国土と私・2	古山 高麗雄/著	『季刊芸術』8(1)(28)	1974	
幽霊	城 夏子/著	『婦人公論』第64巻第13号	1979	
私の履歴書⑦	仲代 達夫/著	『日本経済新聞縮刷版』2005-11	2005	R071 二

第16回中野区ゆかりの著作者紹介展示
幻のモナミブックリスト

ガラスケース展示資料

書名	著者名	出版社名	出版年	ページ	内容
新しい芸術の探求	夜の会／編	月曜書房	1949		夜の会が発行した資料
その人 その頃	中島健蔵・巖谷大四／連著	丸の内出版	1973	写真番号: 26.30.58	モナミで撮られた写真
沢野ひとしの少年少女絵物語	沢野ひとし／著	本の雑誌社	1986	p.8-	「神田川」にモナミの描写
写真で見る東京の激変	大竹静市郎／著	世界文化社	2005	p.198-199	モナミ前写真。喫茶部
味の東京	関瑞男／編	新紀元社	1956	p.335	モナミ広告
世田谷時代1946-1954の岡本太郎 1・2	世田谷美術館／編	世田谷美術館	2007	2巻p.56-57	モナミの写真、チラシなど
文学者 第57号(昭和30年4月号)	十五日会／編	十五日会	1955		十五日会が発行した雑誌

協力機関・協力者一覧 (五十音順・敬称略)

川崎市岡本太郎美術館
世田谷美術館
中野区企画部広聴・広報課

石室屋政昭
井上祐一
岡玲子
小前洋子
恒松龍兵
水上優
宮井昭隆

※モナミのパフレット及び写真については、『世田谷時代 1946-1957 の岡本太郎』（2007年、世田谷美術館）の開催にあたり、世田谷美術館と世田谷文学館が調査時に入手した画像データを世田谷美術館よりご提供いただきました。

第16回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

幻のモナミ

～東中野に集った文化人～

発行年月日 2020年3月31日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷番号 31 指中教函中第299号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9番7号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090



中野区立図書館

<https://library.city.tokyo-nakano.lg.jp/>